

トンボの一生（いっしょう）

1. 卵——ムカシトンボやヤンマの仲間など、植物の組織の中に産みこまれる卵は、バナナ状か、長いカプセル型。水中や泥の上に産み落とされる卵は、球状か、卵型。一か月くらいでふ化するが、数日でふ化したり、冬中卵で過すものもあります。
2. 幼虫——グループによって、形がとてもちがっています。細長く腹の先に3本の尾のようなエラがあるイトトンボやカワトンボ、ひらべったいサナエトンボ、大きくて長いヤンマ類など。シオカラトンボやアカトンボの類は、短くて幅が広く、腹の先の方にはとげがあります。ふつう水中にすんでいます。泥や砂の中にもぐっているものもあります。生きたエサを食べて、十数回皮をぬいで、10か月くらいで、成虫になります。だから、一年で1世代という種が多いですが、ムカシトンボなどは幼虫時代が7年もかかります。ぎゃくに、1か月くらいで成虫になるウスバキトンボのようなあわてもものもあります。
3. 成虫——羽化してしばらくはエサをとりながら、成熟するまですごします。アキアカネのように、かなり長距離移動するものもあります。成熟してくると、配偶行動に入り、交尾をします。連結したまま飛んでいるのもよく見かけます。やがて、メスは産卵をして、死んでいきます。
4. 冬ごし——ふつう卵か幼虫で冬を越しますが、オツネトンボ、ホソミオツネトンボ、ホソミイトトンボの3種は、成虫のまま冬を越します。ウスバキトンボのように、卵も幼虫も日本で冬がこせないため、毎年南から渡ってきては、繁殖をくりかえし、冬には死んでしまうトンボもあります。
5. 天敵——幼虫時代は、水中で他のヤゴや大型の昆虫(タイコウチなど)、カエルや魚、水鳥などに食べられます。
成虫時代は、鳥、カエル、他の大型の昆虫やトンボ、クモなどに食べられます。